こや通信（名称募集）（公開版）NO.３０

富士宮北高校校長室

「本物」を知ろう

令和８年９月２５日

歌舞伎のブームに乗っかりたい。「本物」を見たい気持ち。

今、「歌舞伎」のブームが到来しているらしい。昨年（2025年）公開された映画『国宝』の大ヒットをきっかけとして、これまで歌舞伎に馴染みのなかった若い世代や初心者が一気に関心を寄せているらしい。歌舞伎座では、2025年7月から12月の来場者数は約25000人を超え、それまでの月平均（約2000人=6ヶ月で12000人）から倍増しているようだ（東洋経済オンライン）。『国宝』（著吉田修一　朝日新聞出版）は、読んでも大変面白いが、映画にして本格的な映像美として李相日監督が描き、横浜流星さんと、吉沢亮さんの演技が素晴らしかったのだろう。そこから「本物」の歌舞伎とはどんなものなのか、本物に触れたいと思ったのだろう。（中村勘九郎さんらの YouTube のコメント）

さて、みなさん、「本物」って何ですか？

本物は広辞苑では「偽物や作り物ではない本当のもの」「確かな実質を備えていること」と書かれる。Gemini では、偽物、模造品ではないこと（真正性）、見せかけではない真実や本質（誠実さ、実体）、そして一貫性（自分らしさ）と説明がある。先ほどの歌舞伎。歌舞伎研究者の服部幸雄氏は、こんなことを述べている。「日本の若者は、音楽、映画、絵画などの芸術には興味があっても、伝統的な日本のことは関心の外にある。能と狂言の違い、能と歌舞伎の違い、歌舞伎と浄瑠璃の違い、これらはわからないが、世阿弥は「風姿花伝」、近松は「曽根崎心中」と結ぶことは知っている。これは大人が本来責任を負わねばなりますまい。（中略）歌舞伎は、理屈で鑑賞する芸術ではありません。感覚、感性にまかせて味わうものです。特に重要なのは、歌舞伎の特色は、俳優の顔、化粧、声、衣装、演技、それらをひっくるめたパフォーマンス（身体の芸）が中心にあるということです。（中略）どこを見てもいいのです。「うまいなあ」「立派だなあ」「かっこいいなあ」「綺麗だなあ」と楽しむことが、素質十分と言えるのです。」



このことから、歌舞伎は「歌舞伎座で見たい」そして、「感じたい」。そこから「本物」が感覚的にわかってくることなのだと推測する。

私も、生徒の皆さんも、もっともっと、本物を見に行こう。何が、本物かは見てみないとわからない。秋はそんなことを大切にしていこう。

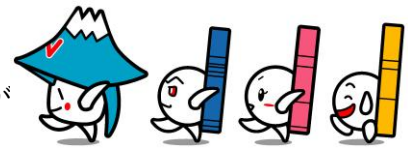
プロフェッショナルとは？　アジア競技大会参加者はプロ？

９月19日から愛知県を中心に、第20回アジア競技大会が行われている。アジアの交流促進を含めて、オリンピックなどに次ぐスポーツ界の大きな国際イベントである。多くのアスリートが活躍し、連日メダル報道などがある。さて、この大会に出場している選手たちは、プロ契約している選手、していない選手混在していることに気づく。「本物」を考える上で、「プロフェッショナル」についても考えてみたい。これは番組（NHK）にもなるくらいなので、無数の考え方がある。私はよく紹介しているが、『岐路の前にいる君たちに』（著鷲田清一　朝日出版社）の中で、学問における「プロ」について、「ある分野でのプロには、他の人たちが気づいていない問題領域で、問題を突き詰めるために、独りもがき、苦しみ、悩み抜いてきたという自負があります。けれども、そうした問題領域でしかその能力を発揮できないというのではなく、何かある一つの問題を究めるという経験をとことんしてきたことで、問題を究めるというその仕方、スタイルが身についていて、だから別のどんな問題でも究める用意があるということがプロフェッショナルの条件ではないか」と投げかけられている。

これは、とても大切なことだと私は感じる。生徒の皆さんは、社会に出ていく。進路選択は、「ある分野」を選択することになる。その時に、しっかりと高い目標を掲げ、もがき、苦しみ、悩み抜いて欲しい。その経験こそが、自らのキャリアと出会える。そのためには、プロフェッショナルな人をたくさん見ておくことが高校生には必要だと思う。

小論文って、恋文（もう死語！？）を書くこと！？

いよいよ、3年生は、進路希望を実現する時である。中には、小論文を書く準備をする人もいるかもしれない。
私は、小論文が、高校生には、とても大切だと思っている。もう古くなってしまったが、私が高校3年生の頃、国語の先生だったかのか、塾の先生だったかの定かではないが、出来の悪い私に『逆想の小論文』（著川崎雅美 ライオン社）という予備校の参考書を紹介してくれた。大変古いので、参考にしないでいただきたいが、この本は今だに手元にあるくらい小論文を好きにした。この参考書では、小論文が書けないのは、「どうやって書くのかがわからないのではなく、何を書くのかがわからないからである。」といわれ、常に、「逆想」の方法を身につけることができれば、何を書くのかがわかってくるという。
少し紹介したい。序章「誘惑する小論文」から、小論文は、恋愛と同じであり、もう今や死語なのかもしれないが、「恋文」を書くよう誘う。恋文の構成から、二段構成（演繹型「結論」→「具体」、帰納型「具体」→「結論」）、三段構成（序論→本論→結論）、四段構成（序論→陳述→論証→結論）、五段構成（序言→陳述→論証→反論→結語）のように、（好きな相手をその気にさせるためにどうするか）恋愛を語るように投げかけられる。
ここからは、具体的なテーマである。青年（意識の上での青年×ライフサイクルとしての青年）、アイデンティティ（個人的な×民族的な）、生きがい（怠惰な×勤勉な）、豊かさ（精神的な（心）×物質的な（モノ））、日本人（集団主義と恥×個人主義と罪）、」国際化（個人的な×民族的な）、環境（人間＝進歩×自然＝伝統）、科学（日本的×欧米的）、教育（教える×育てる）と二項対立的な根拠を示しながら論ずる「何を書くのか」を紹介していく。
この書かれ方が、私にはハマった。何かを考えるには、常に「もう一方の」何かを知っておくことが、話を面白くしたり、何か準備をしたりするのに役に立つ。私にとって、物事を考える上で、この思考が今だに生きているのである。小論文は、論理的思考力や表現力などが養われるという。たしかに。
さて、今回は、「「本物」を知ろう。」との通信にした。自分とってのみの「本物」もあるのではないかと思う。なぜならば、私にとって重要で残り続ける参考書がある。私にとっては本物だが、他の人にはまがいものかもしれない・・・なぞ。



「本物」と思った神戸牛　～「本物」を感じるためには？

9月19日から、ある学会に参加した。学会は、全国各地から持ち寄られる実践研究、最先端の知見などを得ることができ、自分（学校）の現在地を知ることができる。
私たち学校の教職員は、常に、マインドセットでき、アップデートできるよう自分なりのツールを持っていないといけないと私は思っている。なぜならば、生徒は毎年新しく、「今」の成長過程を経て、高校に入学してくるからである。
そんな学会の夕食。会場が神戸であったことから、美味しい食べ物を紹介してもらった。現地に詳しい方からの「神戸牛」専門店。部位までわかるほど、グルメではないので恥ずかしいが、お刺身のようにいただいたお肉。食べた瞬間に程良い油の旨みと、柔らかい肉の食感が口に広がり、口が悦び、頬が緩んだ。そのあとから運ばれる肉も次から次と驚く美味しさであった。時に値が張っても「本物」を食すことは大切である。生徒の皆さん、常に本物と言われる!ものと出会うことが、第1歩です。



生徒につけたい力、宮北 base⑤「未来を創る力」



富士宮北高校の教員が生徒の実態から、生徒に求めたいと思う大切な力はこれだろう。「挑戦する姿」「意欲的に取り組む姿」「自己決断する姿」などの人物像を描いている。そのために、「誰も正解を知らない時代に、自らの意志で道を切り拓くためのエンジンとなる力」を想定している。具体的には、「主体的に行動する（主体性）。」「決断力（意思決定、行動する）」だと捉えている。意識していますか、皆さん。本校は、覇気・信念・明朗を目指す。通信に示した5つの力をつけることが根っこにあると知ってください。